

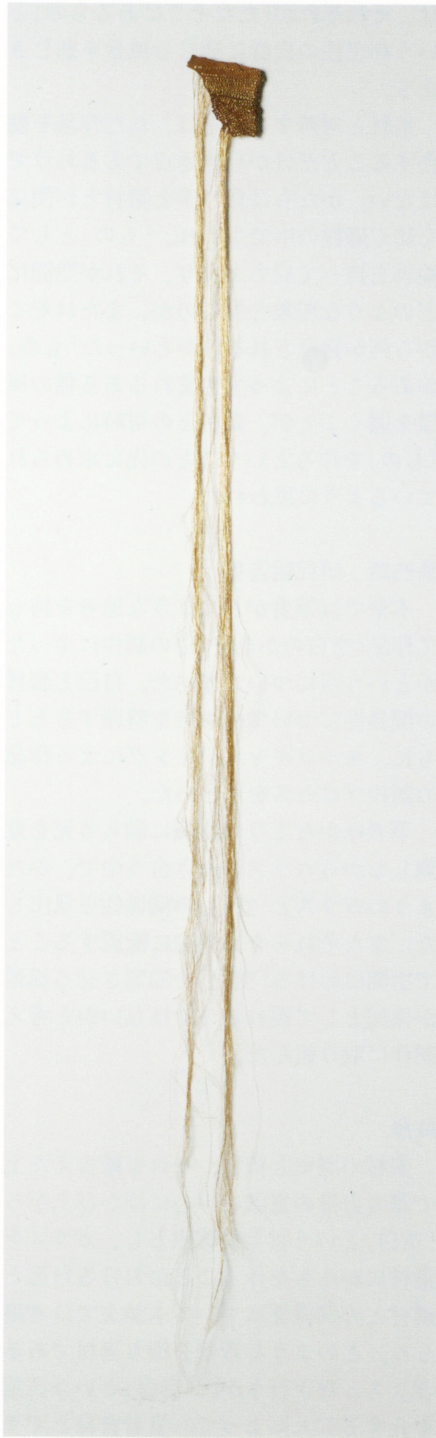
柵瀬 茉莉子

SAKURAI Mariko

縫う行為による時間の視覚化 作品「縫うこと」及び研究報告書

Visualization of Time by Act of Sewing Work "Sewing" with Research Paper

デザイン学領域群 クラフト領域



縫うこと

Sewing

木端、金糸、ポリエステル糸

2010-2012

序

縫う行為の応用による造形分野について、制作を通して開拓することを目標に、主として時間と結びつけて研究した。縫うという単純な行為の繰り返しは、物質ではない時間を目にみえるものにする力があると仮定し、過去から現在までの事例や自身の実験も加え考察した。

第1章「縫う」機能から装飾、そして意味へ

縫うという言葉でまず自身がイメージするものは、幾何学模様が美しい東北地方の刺し子だった。本章ではまず、刺し子の代表ともいえる青森県の津軽こぎん刺しと南部菱刺しについて調べた。木綿衣が普及する以前の麻の時代、寒さから肌を守るために始まった機能としての縫う行為は、日本の手の仕事を代表する装飾美へと発展していった。また、福島県立博物館の民俗学者佐々木長生先生を訪ね、山形県庄内地方及び福島県会津地方の人たちが、刺し子の図案に込めた意味についてお話を伺った。

第2章「想いを縫い込む」

前章を受け、装飾的にも美しいアイヌの民族衣装と千人針に込められた意味に着目した。家の窓や出入り口、鼻や耳など、あらゆる口から邪気が入ってくるというアイヌの信仰に基づき、衣服の襟や袖にもおまじないの刺繍が施された。戦時中の千人針については、「無事帰還」という、当時言葉には決してできなかった胸の内を縫いに込めたものだった。

第3章「時間」

千人針のように縫われたものから時間的にじみ出てくる例として、先祖代々継ぎ足され、使われ続けてきた東北のぼろといわれる衣服や生活を支えた布について述べた。さらに、時間を記録する縫うこと以外の身近な例として、木の年輪に注目し成長の過程を解説した。

第4章「表現としての縫う行為とは」

本章では現在に目を向けた。地図を縫う作家秋山さやか氏をあげ、日記や記録のような表現についてと、手段として縫うことを選ぶ意味について考察した。

第5章「自身の制作における“縫い”」

縫うという手段により進めてきた自身の活動の中から時間の視覚化への試みを報告した。

・「かさぶた」キリの年輪を辿る

・「葉っぱのかさぶた」葉の跡をのこす

放っておくと消えてしまうもろい材であっても、布などの強度や性質の異なる素材との併用により、そのものが実在した形跡を縫い目としてのこすことが可能だった。時間の経過を表すひとつの方法を見つけた。

・「夜の刺繍」光ファイバーによる大勢の縫い目

限られた時間の中での制作だったが、ひとりではなく大人数だからこそ実現可能な縫うことがあることに気付いた。人により異なる多くの手のあとが、費やした時間と共に縫い目となって浮かびあがった。

第6章「修了制作報告書」

2010年より福島県喜多方市にて、自身は制作を目的にたびたび逗留生活をした。現地の方たちとの暮らしの中で、材木屋に眠っていた様々な材を譲り受けるようになった。また糸は、いただきものの金糸も含め、強度のあるポリエステルなど、材質による違いを手で確かめながら作業を進めた。この章では作品「縫うこと」に含まれている、ものができていく背景や過程を報告した。

終章「まとめ」

今一度研究を振り返った。縫う行為による時間の視覚化は果たして可能なのかという問題と、制作と研究から今後取り組むべき課題を導き出しまとめた。結論として、そもそも縫うことは、時間が自ずと視覚可能なものとして表れてくる行

為だった。縫い手が意識しなくても、縫われたものからは当時の様子を想像することができるのだ。そのため、修了制作では時間を強く押し出すのではなく、縫うことにより視覚化される時間をものにとじ込めようとした。現在手に入る素材を用いてひと針ずつ縫いつづる。単純に時間のかかるこの行為により、普遍的な時間、そして想いが縫い目として記録されることを研究により導いた。

最後に、制作と研究からみてきた今後の課題についてふれた。これまで、自身が縫いを施してきた素材のほとんどは、いつしか崩れて土にかえる葉や樹皮、または製材の過程で必要とされなくなった木端など、本来消えていくものや、価値を見いだされることなく捨てられていくものを選んできた。第5章の「かさぶた」や「葉っぱのかさぶた」のような、実在が消えていくと共にものの形跡が縫い目として浮かびあがっていく実験や、修了制作で扱った材のように、縫ったそばから割れていく素材もまた魅力的で、今後そこをさらに探っていきたい。自身の制作においては、いわゆる作品がもとの姿を失ったとしても、それは時間の流れの中で仕方ないこととしたい。たとえ、作品がぼろぼろになっても構わない。さらに、完全に実在が消えてしまっても縫うことは成立するのか、これについても今後の課題にする。

毎日多くのものが生まれ、惜しまれることなく消えていく一方で、ほんのひとにぎりのものがのこっていく。そんな時間の中でのものの成り立ちと、そこへの縫うことの関わり方についてこの先も模索していきたい。縫うことの繰り返しは、皆が共有している今この瞬間の連なりに、いつも寄り添っている。